

ヤスパース哲学における「本来的现实性」とは何か？

中山 剛 史

ヤスパースは『実存哲学』の冒頭で、哲学の本来の課題は「现实性 (Wirklichkeit) をその根源において見てとり、それを……内的行為において捉えること」、すなわち「现实性への還帰」であるという。それでは、ヤスパースの哲学において、真の「现实性」とは一体何を意味するのであろうか。

われわれは通常、目の前にある具体的な事物や出来事のリアリティを唯一の「现实性」と信じて疑わない。しかし、はたしてそうした「实在性 (Realität)」を真の「现实性」とみなしうるのであろうか。科学が捉える「客観的现实性」は確実に否みえないものであるが、科学的認識が進めば進むほど、「现实性」そのものはどんどんと後退していく。のみならず、われわれの日常的な「实在性」も、「现实性とその深みにおいて顕現していない」ところでは、「本来的现实性」の喪失でありうる。それでは、「本来的现实性」とは何であろうか。

われわれはここで、「现实性」が一次元的ではないことに注目しなければならない。科学の捉える「客観的现实性」は、あくまで多次元的な「现实性」の単なる一様態や一段階にすぎない。『哲学』では「现实性」の三段階が述べられているが、『真理について』では、「包括者」の諸様態に応じた「真理」の諸様態と「现实性」の諸様態とがさらに細かく分節化されている。いわば、われわれの〈主体〉のあり方に応じて、われわれに現われる「现实性」のあり方も異なったものとなるといえよう。いわゆる「客観的现实性」は、「意識一般」に対して現われるが、「現存在の现实性」や「精神の现实性」は、そうした「客観的现实性」とは別次元の「包括的な现实性」である。他方、「超越者の现实性」は、ただ「実存の现实性」にとつてのみ顕現する。ヤスパースの「包括者論」は、このように〈现实性の多次元性〉をわれわれに自覚させ、「本来的现实性」が顕わになる〈場所〉をうち開くという意義をもつものといえよう。

こうした〈現実性の多次元性〉という観点からすると、「経験的現実性」は決して究極の「現実性」ではない。われわれが「限界状況」に直面して唯一無二の「実存」に覚醒するとき、もはや「経験的現実性」とは異なる「実存的現実性」が確信される。しかし、この「実存的現実性」もまだ究極の「現実性そのもの」とはみなされない。ヤスパーズにとって「本来的現実性」とは、究極的には、「超越者の現実性」に他ならない。それは、後期シェリングの「神の現実性」にも比すべき、いかなる思惟可能性にも還元しえない「可能性なき現実性」であり、「思惟の挫折」において実存的に確証される「永遠の現実性」である。この「永遠の現実性」は、決定的な「瞬間」においてこの実存にとって〈他ではありえない〉必然性として、実存の「歴史性」において顕現する。しかし、それは一回的な神の啓示を唯一絶対化する「宗教的現実性」とは異なり、あくまで個々の実存にとってそのつど一回的な仕方、多義的な「暗号」として語りかけるものである。こうした「超越者の現実性」は、「意識一般」にとっては単なる「幻想」にすぎないが、翻って実存の根源的経験の〈場所〉においては、そのつど一回的な「実存的現実性」を通して語りかける「本来的現実性」として確信されるものである。このように、われわれの存在意識を「日常的な実在性の思考」から、「本来的な現実性の意識」へと転換させることにこそ、「現実性への還帰」としてのヤスパーズ哲学の真の課題があるといえよう。

原題：Was ist die eigentliche 'Wirklichkeit' in Jaspers' Philosophie?

(玉川大学助教授)